

クローデットの場合

山下 壮 起

奨励者紹介〔やました・そうき〕

日本キリスト教団阿倍野教会牧師

実を結ばない暗闇の業に加わらないで、むしろ、それを明るみに出さない。彼らがひそかに行っているのは、口にするのも恥ずかしいことなのです。しかし、すべてのものは光にさらされて、明らかにされます。明らかにされるものはみな、光となるのです。それで、こう言われています。

「眠りにについている者、起きよ。

死者の中から立ち上がれ。

そうすれば、キリストはあなたを照らされる。」

愚かな者としてではなく、賢い者として、細かく気を配って歩みなさい。時をよく用いなさい。今は悪い時代なのです。だから、無分別な者とならず、主の御心が何であるかを悟りなさい。酒に酔いしれてはなりません。それは身を持ち崩すもとです。むしろ、霊に満たされ、詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。そして、いつも、あらゆることについて、わたしたちの主イエス・キリストの名により、父である神に感謝しなさい。

(エフェソの信徒への手紙 5章11—20節)

クローデット・コルヴィン

1955年12月1日、アメリカ南部のアラバマ州のモンゴメリーという町で、ローザ・パークスというアフリカ系アメリカ人の女性が逮捕されました。今から61年前のちょうど今頃のことです。逮捕の理由は、バスの席を立たなかったからです。当時、人種差別が法律によって制度化されていたアメリカ南部では、アフリカ系アメリカ人の乗客はバスの後ろの方にしか座ってはならず、バスが混んできたら、白人の乗客に席を譲らないといけないという法律がありました。

しかし、その日、ローザ・パークスさんはこれまでの差別的な圧力に屈するのが嫌になり、座席を白人に譲るのを拒みました。この行為によってパークスさんは逮捕されてしまいますが、この出来事をきっかけに、以前から計画されていたバス・ボイコット運動が実行され、その指導者にキング牧師が選ばれ、それまで地道な活動を続けていたアフリカ系アメリカ人の公民権運動が大きく展開していくこととなりました。

しかし、実はパークスさんよりも以前に、アラバマ州で初めて人種差別に抵抗してバスの座席を白人に譲ることを拒否した人がいました。クローデット・コルヴィンという当時15歳の高校生の女の子です。パークスさんが逮捕されたときから9カ月前の1955年3月2日、クローデットさんは白人女性に席を譲らなかったことで逮捕されました。

バスの運転手から席を立つようにと命令されても、彼女は「私はちゃんと運賃を支払いました。これは憲法で認められた私の権利です」と訴えました。彼女がしっかりと自分の意志を表したのは、高校生ながら

地元で盛り上がってきていた公民権運動に関わっていたからです。

クローデットさんが釈放されると、以前からバス・ボイコット運動を計画していた地元の市民運動家たちのなかから、彼女を運動の「顔」にしようという案が浮上しました。しかし、その案はいくつかの理由から、すぐに取り下げられてしまいました。

一つは、クローデットさんがキングヒルという貧困層の多く住む地域に住んでいたからです。実際のクローデットさんは公民権運動に関心を持ち、いろいろなことに関わっていました。しかし、貧困層の多く住む治安の悪い地域で育った貧しい家の女の子というクローデットさんへの偏見によって、どうせ素行の悪い貧乏な女の子が騒いだけだと、誰も相手にしてくれないと考えたということです。

そして、もう一つの理由は、クローデット・コルヴィンさんのお腹のなかに赤ちゃんがいたからです。つまり、15歳という若さで未婚でありながら妊娠したことが問題になり、彼女をバス・ボイコット運動の象徴とするには「ふさわしくない」と判断したということです。

このような判断が下された背景にあったのは、奴隷制時代からのアフリカ系アメリカ人の解放運動の戦略です。アフリカ系アメリカ人の解放運動は、自分たちは道徳的に立派である、高い道徳性をもっているんだと示すことで、アメリカ市民としてふさわしいことを証明し、公民権を獲得しようとしてきました。そして、その道徳性の高さを請け負ってきたのが教会でした。それゆえに、公民権運動のリーダーの多くはキング牧師をはじめとする教会の牧師たちでした。

一方で、教会が中心となってこのような戦略を取ってきたことによって、アフリカ系アメリカ人社会のなかで、貧しくてきちんとした服装を買う余裕のない人、差別が制度化された社会に抵抗する態度を取る若者たち、また、厳しい現実にならざるを得ないお酒やドラッグに溺れる人たちが、道徳的にだらしない人々として切り捨てられてきました。

そして、同じように、15歳で未婚のままに妊娠したクローデット・コルヴィンは性的にだらしない少女だと断罪され、勇気ある行動をとったのに、公民権運動の「顔」となることはありませんでした。しかし、それだけでなく、教会が彼女のことを取り上げてしまったがゆえに、未婚のままに妊娠したということだけが地元のなかで話題となり、社会の好奇の目に晒されてしまいました。その結果、彼女はほどなくして地元を離れて、他の町へと引っ越していくこととなりました。

姦通の女を罪に定めないイエス

道徳的優位性を広く示そうという公民権運動の戦略によって排除されたクローデット・コルヴィンのことを思うと、私はヨハネによる福音書8章に描かれる姦淫した女を罪に定めなかったイエス様の出来事を思い起こします。この箇所では、神殿の境内にいたイエス様のところに、配偶者ではない男性と密通した女性が捕らえられ、連れてこられた様子が描かれます。

女を連れてきた人たちは、ユダヤ教の決まりである律法を正しく守ることを重視していた人たちでした。彼らはその律法に照らせば、この姦淫した女は石で打ち殺さなければならないとあるが、お前はどうかするとイエス様にしつこく迫ります。するとイエス様は、「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい」と言いました。すると、一人、また一人と、その場から去っていき、イエス様

とその女だけがその場に残されました。そこで、イエス様は「わたしもあなたを罪に定めません。行きなさい」と告げました。クローデットの出来事は、このイエス様の物語を思い起こさせます。

今日の聖書箇所の前5章3節から4節には、「あなたがたの間では、聖なる者にふさわしく、みだらなことやいろいろな汚れたこと、あるいは貪欲なことを口にしてはなりません。卑しい言葉や愚かな話、下品な冗談もふさわしいものではありません」とあります。

このような聖書の言葉に基づいて、道徳的、倫理的に正しいことが聖なる行いであり、それと真逆なことが俗なること、恥ずべきことであるという価値観がキリスト教のなかで生み出されてきました。皆さんのなかにも、クリスチャンは清く正しく美しい人たちだというイメージがあるかもしれません。

しかし、姦淫した女を罪に定めないイエス様の姿が伝えるのは、そうした道徳的な正しさを聖なるものとする考え方とは真逆の視点です。道徳的な観点に立てば、何が正しくて何が悪いかという基準をもつことができます。しかし、その道徳的な観点による基準は完璧なものでしょうか。あるいは、道徳に反映される価値基準はどのように、何のために定められているのでしょうか。

例えば、もう少しすると、小中学校で道徳が特別な教科として教えられることになっていますが、このことに多くの反対意見が見受けられます。問題となっていることの一つは、人間の倫理性というのは、私たちが思うほどに洗練されたものではないということです。

例えば、日本政府が道徳を教科化することを決めましたが、その政府はしばしば嘘をつきますし、弱者の立場を無視した政策をいくつも行ってきました。それは、誠実さや思いやりといった道徳的価値観とは矛盾するものです。

もう一つの問題は、道徳が定める決まりや価値観というのは、社会や時代の多数派によって決められたものであるということです。それは言い換えるなら、道徳というものの自体、時代や状況のなかで変化するものだということです。

時代や状況によって変化してしまう価値観は普遍的なものではなく、絶対視されるべきではありません。そして、多数派の考えに基づく価値基準を絶対視してしまえば、その決まりや価値観によって少数派や弱い立場にいる人が排除されてしまいかねません。

時代や社会の多数派によって形成される道徳的な価値観に基づいて、何が良くて何が悪いかを判断し、悪いことと判断された事柄や行為を断罪するのは簡単なことです。しかし、姦淫の女を罪に定めなかったイエス様の姿は、道徳とは何か、どのように誰によって道徳的価値観が決められているのかを見極めるように伝えているように思います。

ヨハネによる福音書8章では、姦通の現場で捕らえられた女が連れ出されたと書かれていますが、その女と姦通した男は連れ出されずに罪に問われていません。つまり、当時のユダヤ人社会における道徳的価値観は男によって形成され、女は男の所有物という考え方があったということです。そして、そんな社会が規定する道徳的価値観によって、女性だけが断罪される社会の在り方にイエス様は立ち向かったということです。

手紙からのメッセージ

今日の聖書箇所5章の冒頭、11節には「実を結ばない暗闇の業に加わらないで、むしろ、それを明るみに

出しなさい」と記されています。エフェソの信徒への手紙が書かれたのは、地中海世界を支配していたローマ帝国が豊かさや安定に向かっている時代でした。そのような状況のなかで、目先の豊かさを追求め、快楽に溺れてしまい、神様のことを忘れるようなことがあってはいけないというメッセージがこの手紙には託されているわけです。

姦淫の女を罪に定めなかったイエス様の姿から考えるならば、「実を結ばない暗闇の業に加わらないで、むしろ、それを明るみに出しなさい」という言葉は、道徳的価値観に立って善悪の判断をするということではありません。イエス様は道徳的価値観によって裁かれてしまう人々の側に立って物事を見るなかで、その価値観を生み出す、社会にある力関係を明るみに出してきました。そして、その力関係に基づく社会のなかで弱い立場に置かれた人々の立場に立って、その人々と共に生きようとされました。

そんなイエス様のメッセージの本質の一つが、先ほど歌った讃美歌21、60番の3番の、『よいこになれない わたしでも かみさまは あいしてくださる』って、イエスさまの おことば」という歌詞に表されていると思います。

社会の基準、道徳的・倫理的基準で他者の人格を判断してしまう私たちですが、矛盾を抱える人間によって構成される社会の多数派によって決められる価値観から離れて考えてみるのが大切なのだと思います。

多数派や権力をもつ者によって決められる社会の価値基準に迎合して、その価値基準に見合う「よいこ」になれなくても全然構わない。むしろ、考えることをやめてしまい、社会の雰囲気や目先の事情に流されて、安易に生きてはならないという思いが、この言葉に込められていると受け取れます。

神の「時」に備えてどう生きるのか

今日の礼拝はアドベント礼拝です。アドベントとは「到来」を意味するラテン語に由来するもので、キリスト教においては、イエス様がこの世にやってこられたクリスマスを迎える準備をする時となっています。

そのアドベントの時、15歳で未婚の母となったクローデット・コルヴィンのことを思うと、同じように若くして未婚のままにイエス様を身籠ったマリアのことを思い起こします。マリア自身、たとえそれが神様の不思議な業によるものだったとしても、未婚のままに妊娠したことで恐れや不安を抱いたはずで

す。若くして、相手もいないままで身籠ってしまったことがバレてしまえば、家族から縁を切れ、世間からは冷たい目で見られてしまうのではないかと。もし、そうなってしまえば、私はお腹のなかの子とどうやって生きていけばいいのか。そんな思いがマリアに重くのしかかっていたのかもしれない。

イエス様自身、母マリアからその時のことを聞いていたのかもしれない。母マリアのそんな経験があったからこそ、イエス様は力をもつ者によって決められる道徳という薄っぺらい正義によって苦しめられる人々の苦しみに思いを寄せることができたのだと思います。

16節には「今は悪い時代なのです」とありますが、この言葉はどの時代にも聞かれてきた言葉だと思います。それは、人間が決して完璧ではなく、多くの矛盾を抱える存在だからです。しかし、その矛盾があたかも存在しないかのように無視して、私たち人間は正しさを求めて、道徳といった基準を生み出してきました。それでも、結局、それは人が人を裁くためのものでしかありません。

一方で、イエス様の姿はその人間が抱える矛盾に正直に向き合おうとするものです。人間は多くの矛盾

を抱えているけれど、それでも一緒に生きていこう。一緒に生きていくためにどうすればいいのか一緒に考えよう。そんな姿勢をイエス様は示してくださっているように思います。そして、それは決して正解、正しい答えを出すことではないはずです。

「人間の正しさ」を超えて存在される神様はどこにいるのか、神様の思いは一体何なのか、問い続ける姿勢です。一人一人が「人間の正しさ」によって裁かれるのではなく、神様の祝福のなかで大切にされるために問い続ける姿勢です。

私たちが生きる今の時代も「悪い時代」と言えるかもしれません。しかし、その「悪い時代」のなかにあっても、イエス様が示してくれた生きる姿勢を大切にしていきたいと思います。そして、一緒に生きることを、その意味を考えつつ、イエス様の生きた姿から伝えられるメッセージを受け止めながら、クリスマスを迎えるこの時を過ごしたいと思います。

2016年11月30日 京田辺水曜チャペル・アワー「アドベント礼拝奨励」記録